

語りえない歴史の闇

クノー『青い花』をめぐって

中里 まき子

序

レイモン・クノーは小説において、つねに新しい形式を探求し、自らの生きた時代を捉えようと試みた。本稿では『青い花¹』を取り上げて、その試みのひとつにスポットを当てたい。クノーはこの小説において、現代というものをいかに語ることができるか、あるいは、語ることができないか、という問題を投げかけ、答えようとしている。いまだ歴史としての位置づけを持たない現在を、輪郭が不明瞭なまま過ぎつつある現実を、小説に描き込むことは可能なのか。可能であるとすれば、どんな方法によるのだろうか。

次章で詳細に検討するように、クノーは、夢と歴史という二つの装置を駆使して、非常によく練られた、奇想天外な構成を持つ小説を完成させている。二人の主人公、オージュ公爵とシドロランは互いに夢見られた存在である。シドロランは小説のはじめから終わりまで、現代のパリと想定される街の川岸に繋がれた、動かない河船に暮らし、頻繁に眠っては夢を見ている。その夢に現れるオージュ公爵は、十字軍、百年戦争、フランス革命などの歴史的イベントの折りに登場する。そしてシドロランを夢に見ている。つまり、シドロランとオージュ公爵はどちらがどちらを夢見ているのかわからないまま、互いが夢見あっているのだ。一方の物語がある程度進展すると、主人公が眠りにつき、夢を見ることを契機に、もう一方の主人公の物語と入れ替わる。こうして、この小説は二人の主人公を交互に登場させながら展開する。

また、『青い花』においては、歴史という要素も特殊な役目を負わされている。オージュ公爵ははじめ 1264 年の時点にいるが、この主人公が眠りにつくと、その夢の内容として現代のパリにいるシドロランの物語が始まる。こう

¹ Raymond Queneau, *Les fleurs bleues*, Gallimard, 1965.

して物語は、1264 年と 1964 年を数回にわたって行き来したあと、オージュ公爵は 175 年後の 1439 年に移動している。同様のメカニズムで 175 年間隔で時代を下ってゆくので、オージュ公爵はやがて 1964 年においてシドロランと出会うことになる。

以上のようにこの小説では、夢と現実、歴史と現在という二組の二項対立が重要な役割を果たしている。しかし、クノーが、夢と歴史という要素を小説に持ち込んだとすれば、それはあくまで、現在の現実を描くためだったのではないだろうか。1964 年はクノーが『青い花』を書いた年である。クノーがこの 1964 年にどのような視線を投げ、どんな方法で表現したか。それが本稿の目標となる。

1 構成——夢と歴史

ここでは、夢と歴史とに依存して織りなされる、『青い花』の複雑な構成を分析し、その特徴を指摘したあと、改めて本稿における問題意識を明確にしたい。

1) 二系列間往復のメカニズム

小説『青い花』は次のように始まる。

1264 年 9 月 25 日の夜明け、オージュ公爵は城の天守の頂きにのぼり、ほんの少し歴史的状況を見てみようとした。それはどちらかといえばぼんやりとしていた。過去の名残りがまだあちこちに、ばらばらに散らばっていた。近くの小川の岸边には、二人のファン族が野営していた。彼らから遠くないところでは、おそらくハエドウィー族だろう、ひとりのゴール人が大胆にも冷たい水の流れに足を浸していた²。

小説の冒頭ではオージュ公爵が登場する。このシーンのあと公爵は、人間の言葉を話す愛馬デモステースにまたがり、小姓のムスカイヨを連れて都へと出かける。1264 年の時点で完成しつつあったノートル・ダム寺院を見に行くのである。ところがオージュ公爵は、デモステースの背に揺られるうちに眠り込んでしまう。

² *Ibid.*, p.13.

[...]乗り手がまどろんでいるのを感じて、[ステータスは]邪魔をしたくないと思った。ステーフとムスカイヨもそうした慎みをとみにしていたので、オージュ公爵はついに眠り込んでしまった³。

そしてこの部分の直後、次のようなパラグラフが続く。

彼はとある大都会のそばに固定して係留された一隻の河船に暮らしていて、シドロランという名前だった。青緑色のマヨネーズをかけたあまり新鮮でない伊勢エビを出されて食べていた。くるみ割りを使ってエビの足の殻を割りながら、シドロランはシドロランに言った。

「どれもこれもひどい代物だな。ラメリーはいつまでたっても料理は下手だ」

依然として自分自身に向かって言った。

「しかし、おれはあんなふうに馬に乗って、いったいどこへ行こうとしていたんだろう？ もう思い出せない。だいたい、夢ってのはそんなもんさ。おれは生まれてから一度も馬に乗ったことはない。自転車にだって乗ったことはない、夢の中でも一度も自転車には乗らないのに馬に乗っている⁴。

こうしてもう一人の主人公シドロランが登場する。ここで読者は、オージュ公爵の物語がシドロランの夢の内容であったことを知るのだ。ところが、次の引用が示すように、シドロラン自身もまたオージュ公爵によって夢見られた存在なのである。

シドロランは口を拭ってつぶやく。

「畜生まだ」

「それがお昼寝の邪魔になるってわけでもないでしょ」と誰かが言う。

彼は返事をしない。長椅子が甲板の上で待っている。彼はハンカチで顔をおおい、そしてまもなく都の城壁の見えるところにいて、それまでの数々の行程のことなど考えもしない。

「しめたぞ」とステータスは叫んだ、「着きましたよ」

オージュ公爵は、まずい食事を食べたような気がして、目が覚めた⁵。

シドロランの食事のシーンはここで、都へ向かうオージュ公爵が居眠りの間に見た夢の内容という設定になっている。互いが夢見あっている存在のオージュ公爵とシドロランは、こうして交互に小説に登場することになる。

³ *Ibid.*, p.16.

⁴ *loc.cit.*

⁵ *Ibid.*, p.17.

2) 175 年周期と始まりへの回帰

二系統の物語を何度も往復することに加えて、小説の展開にはもうひとつの規則がある。その規則は時代設定に関わるものである。

クノーが小説の序文で明記したように⁶、常に現代に留まり続けるシドロランに対し、オージュ公爵は 175 年間隔で時代を下りながら小説に登場する。つまり、1264 年、1439 年、1614 年、1789 年、1964 年という五つの時代である。『青い花』は 21 章で構成されていて、最終章はエピローグとして除外されるので、それぞれの時代には一様に 4 章ずつが費やされている。

はじめの 4 章では、オージュ公爵の夢、すなわちシドロランの物語に中断されながら、1264 年を生きる公爵の物語が展開される。公爵はノートル・ダム寺院の建設現場を見に行ったり、聖王ルイによって十字軍の遠征に誘われたりする。そして第 5 章では、シドロランのもとへ娘たちとその夫たちが訪ねてくる場面のあとで、オージュ公爵の物語がこのように始まる。

保安隊[céhéresse=CRS]とはといえば、もはや昔がむして廃墟と化したその墓しか残っていなかった。ルイの名九代目の王のところに戦って敗れた保安隊のことなど覚えている人はいなかった。

オージュ公爵は片目を開き、そしてピロトン師がとある第三の質問に答えねばならないのに、まだなにも答えていないのを思い出した。第二の、そして最後に残った眼を開いたオージュ公爵は、視界のうちにピロトン師の姿を見つけることはできなかった。

「ああ、坊主め、ろくでなしめ、怠け者め」と公爵は唸った。「賭けてもいい、あいつはパーゼルの宗教会議へ出かけたに違いない。フェラーラやフィレンツェの会議でないとすればだ。まったく見当がつかない。いずれにせよ楽しい話だ⁷」

パーゼルの宗教会議 (1431-1449) への言及がなされることから時代の推移が読み取られる。第 5 章から第 8 章までの間には、公爵が大砲を購入したり、ジル・ド・レーやサン・ジェルマン・ロクセロワ寺院の火炎式正面玄関、シャルル 7 世の歩兵隊や勅令長槍部隊などが話題にのぼったりして、時代設定が 1439 年であることが示される。

上の引用からわかることは、175 年という時間を飛び越えても、オージュ公爵の人物像や身を置いている状況設定にはある一貫性が認められることで

⁶ Ibid., p.7.

⁷ Ibid., p.66.

ある。1264 年において、十字軍への参加を拒んだことに逆上し襲いかかってきた民衆を、公爵が刀剣で殺めるという事件があった。第 4 章は、その罪に対して償いを要請する国王保安部隊が、公爵の領地に攻め入って来たところで終わっていたのだ。また、ここで言及されている礼拝堂付司祭のオネジフオール・ピロトン師をはじめとして、第 4 章までに登場していた公爵を取り巻く人々は、公爵とともに時代を飛び越えて行く。このあとも同様のメカニズムに従って、公爵は 1614 年、1789 年と時代を下り、1964 年においてシドロランと出会うのである。

1964 年は、先行する四つの時代とは区別された、特権的な時間である。1964 年は序文では明記されているものの、小説中では一度も明確には表示されない。オージュ公爵の物語とは対照的に、シドロランの物語においては、時代を示すような事件はこれと書いて書き込まれていないのだ。ただし、オージュ公爵が 175 年間隔で時代を下ってきて、13 章から 16 章までが 1789 年に充てられることを考えると、17 章以降はさらに 175 年後の 1964 年であると考えるのが自然である。また、シドロランの娘たちとその夫たちがテレビに熱狂し、競って自家用車を購入することなどは、時代設定が戦後であることを示している。

1964 年に留まり続けるシドロランと、175 年間隔で時代を下ってきたオージュ公爵はこの年代において出会うのであるから、1964 年に充てられた 17 章以降では、二つの夢、二つの時代を往復しながら進行するという小説の規則は破られることになる。17 章以降、二人の主人公は夢見ることをやめ、ひとつの世界に生き、ひとつの物語を共有するのである。

そして最終章の第 21 章で、オージュ公爵は最後にもう一度だけ時代を移動する。シドロランの河船に乗り込んだ公爵とその仲間が河船を岸から切り離すと、小舟で岸へと逃げて行ったシドロランを置いて、河船は河の流れを遡って行く。

そのときに雨が降り始めた。何日も何日も雨は降り続いた。あまりの霧で、河船が進んでいるのか戻っているのか、それとも停止したままなのか、知ることはできなかった。船はついにとある城の天守の頂上に座礁した。乗客たちはそこに足を下ろした。ステータスとステーフはひと苦労だった。彼らは、かわいそうに、ひどく痩せて、ひどく疲れていた。水はすでにいつもの河床と集積所に戻り、太陽がはやくも地平線に高くなったその翌日、公爵は目を覚ました。彼はほんの少し歴史的状況を見てみよう、銃眼に近づいた。泥の層がまだ地

上を覆っていた、けれど、そこそこに、はやくも小さな青い花が咲いていた⁸。

シドロランの河船が「箱船号」と呼ばれていた理由がここで明らかとなる。オージュ公爵は、小説の冒頭で立っていた城の天守の頂上に再び戻っている。こうして『青い花』は閉じられる。

3) 夢の夢

以上のような構成と設定のもとに書かれた『青い花』は、形式上は、読者が住む現実世界からは切り離されており、小説に現実味を与えようとするレアリスム小説のあり方とは無縁であると言える。夢見あっているオージュ公爵とシドロランは、どちらが夢を生き、どちらが現実を生きているのか特定することはできない。夢から覚めても限りなく夢の世界が続くのだから。17章以降は二人が同じ世界を共に生きることになるが、その世界にしても最後には「大洪水」によって洗い流され、小説の冒頭と同じ状況へと戻されてしまう。

しかし、この、現実という支えを持たない閉じられた円環には、読者になじみの現実世界が多量に流れ込んでいるのだ。シドロランが生きる世界はフランスの現代社会を示す記号によって彩られ、オージュ公爵の世界には、歴史として人々に認知されたさまざまな事件や人物が登場する。さらに、内容を伝えるテキストのレベルでも、現実世界に存在するテキストのパロディや引用が数多く確認される。つまり、現実味への配慮とは無縁のはずの、夢のまた夢という設定の中に、現実が滑り込まされ、閉じこめられているのだ。

序で述べたとおり、本稿は、この小説の対象が現在の現実であるとする見方を取っている。それは、たとえクノーが夢と歴史を用いて複雑な構成を作ったとしても、その目的は、現在の現実を描くためであったと考える立場である。小説の構造上は確かに、二人の主人公のうちどちらが夢に住み、どちらが現実を生きるのか判断できないようになっている。しかし物語の内容に目を向ければ、1964年に留まるシドロランよりも、言葉を話す馬に乗り、五つの時代を横断して生き続けるオージュ公爵のほうが、現実には存在しえない、夢の中の人物であると考えられるだろう。ところがクノーは、片方を現実、もう片方を夢として固定することを拒み、シドロランの世界もまた、オージュ公爵によって夢見られているという設定にした。小説の対象と考えら

⁸ *Ibid.*, p.276.

れる現在の現実、すなわちシドロランの生きる世界は、オージュ公爵の歴史的な世界と交互に並べて提示されるばかりか、夢見られた内容という設定のもとにおかれるのだ。

以下では、『青い花』の対象が現在の現実であることを明確にしながら、この対象がどんな性質を持つのか、さらに、この対象が上述のような構成と設定をもって提示されるのはなぜなのか、検討してゆきたい。こういった試みを通じて、クノーが『青い花』において捉えようとした、現在の現実という対象そのものの性質が、小説にこのような書き方を要請したことを示せるだろう。

すでに指摘したように、16章までと17章以降とは、小説の構成にも内容にも本質的な違いがある。よって、次の第二章ではまず、16章までに展開されるシドロランの物語に注目し、続く第三章では16章までのオージュ公爵の物語、第四章では二人の主人公が共生する17章以降を扱う。

2 「現在」としての1964年

シドロランの物語が展開するのは、1964年のパリ、すなわち、小説を書くクノーを取り巻く現実と同一の世界である。描かれる対象である主人公の生活と、クノーが用いた書き方との間に確認される対応関係を、以下に指摘してみたい。

1) 断片的な現在

オージュ公爵によって夢見られるシドロランの生活は、単調で受動的なものである。彼は現代のパリと想定される街の、川岸に繋がれた動かない河船に暮らし、頻繁に眠っては夢を見ている。消極的で静かな生活を送るシドロランに対し、人は次のように言う。

おやおや、あそこにひとり、人生においてたいしてなすべきことのないやつがいるぞ⁹。

これは、シドロランを観察するキャンプ場の管理人の言葉だ。次は娘のラメ

⁹ *Ibid.*, p.196.

リーの言葉である。

「彼はいつだって、何もしないために何かを見つけ出すのよ」とラメリーは言う。「彼は何もしないでいることが上手なのよ¹⁰」

しかし実際のところは、シドロランは何もしていないわけではない。彼は、何者かが川岸に沿った囲いを落書きで汚すので、ペンキを塗り直すことを日課としている。また、河船の近くの建設現場を眺めたり、世界中からキャンパーが集まるキャンプ場を見に行ったり、ウイキョウのエキスを飲んだりして毎日を過ごしている。

シドロランが何もしていない人物と言われ、その生活は何も起こらないという印象を与えるとすれば、それは彼が生きる現実の断片的な性質に由来するだろう。最初に登場するときシドロランは昼食の最中である。食事のあと昼寝をしてオージュ公爵の旅を夢見ていると、二人のキャンパーに昼寝を中断され、シドロランは彼らと会話を交わす。そして次に目覚めると、アパートの建設現場を眺めに行くのだが、そのときすでにキャンパーのことは忘れ去られている。

このように、夢を見ることによって中断される前後の内容を比べると、シドロランの物語には論理的な進展や一貫性が認められない。彼は夢から覚めるたびごとに新しい場面に立ち会うのである。シドロランの夢、すなわちオージュ公爵の物語によってシドロランの物語が中断され、断片化されるわけだが、それは逆に、シドロランの生きる現実そのものが断片的であるために、オージュ公爵の物語に介入されざるをえないとも言える。それぞれの出来事はばらばらに投げ出されたままで、ひとつの物語として収斂されることはない。シドロランの生活は、断片的であるために何が起こっているのか特定されえず、ただ、無為として認識されるしかないのだ。

この、断片的であるという性質は、1964年についてクノーが示そうとした特徴のひとつである。なぜ1964年が断片的であるかといえば、それは、過去や未来と切り離された「現在」という時間が、進むべき方向性を持たないからではないだろうか。シドロランは自らが住んでいる河船「箱船号」とアナロジーの関係にある。時間の流れを象徴する川の流れの中で、箱船号は決して動くことはなく、どの方向を向いているのかさえわからないのだ。

¹⁰ *Ibid.*, p.62.

2) 進展しない会話

シドロランの物語は、断片的であること以外にもいくつかの要因によって進行することを阻まれている。次の例はそのひとつである。

「船舶税の調査官が来たよ」
「バスに乗ったの」
「すっかり検査して行った」
「車掌がおかしな人だったわ」
「わしは大変ほめられたんだ」
「その車掌ったら乗客ひとりひとりにおかしなことを言うのよ」
「調査官は『箱船号』がA級の二つ錨の格があるとやった」
「私にも話しかけたわ」
「まだ三つ錨じゃない。まあ、二つだって悪くはない」
「あなたは定期券よりもずっとスタイルがよくて、回数券よりもずっと丸々していますね、なんて言うのよ」
「もちろん、わしはもっとたくさん税金を払うことになる。でもそれは、生活程度が高いということだし」
「まあ、あなたったら、失礼しちゃうわね、と私は彼に言い返してやったの¹¹」

この会話のシーンでは、シドロランと娘のラメリーが、相手の話を聞かずそれぞれに勝手に話しているので、対話者同士がある話題をめぐって会話を進展させることができない。『青い花』はテキストの大部分が会話に占められているのだが、シドロランの物語においてはある方向に向かって話題を掘り下げ、発展させることができないのだ。

次のような場合もある。すでに嫁に行ったシドロランの二人の娘とその夫たちが河船を訪れ、シドロランに向かって、ラメリーの気晴らしのためにテレビを購入するべきだと勧める。するとこのような会話が続く。

「どうだねラメリー」とシドロランは言う、「結婚するまでのあいだ、おまえは気晴らしをしたり勉強したりしたいかね？」
「いいえ、パパ、私がしたいのは接吻することよ」
「テレビではほとんど接吻はしませんね」とリュセが指摘した。
「まったくと言っていいくらい接吻はしませんよ」とヨランが言う。
「二人とも馬鹿ね」とベルトランドが言う、「だって子供が見ているからよ」
「あなたのとこじゃ、子供たちに好きなだけテレビを見させておくの？」とシ

¹¹ *Ibid.*, p.51.

ジスモンドが尋ねる。

「教育になるものだけね。」とヨランが答える。「とりわけニュース番組。あれは子供たちにフランス史や、世界史も教えることになるからね¹²⁾」

こうしてテレビのニュースと歴史との関連性について議論が始まるが、合意に達することのないまま、次のように会話は循環してしまう。

「[...]だからみんなでラメリーに、彼女が退屈でないう、パパはテレビを一台買ってやるべきだと言っているのよ」

「ああ、でも」とシドロランは言う、「ラメリーが考えているのは接吻することだけなんだから」

「テレビではほとんど接吻はしませんね」とリュセが言う。

「まったくと言っていくらい接吻はしませんよ」とヨランが言う。

「二人とも馬鹿ね」とベルトランドが言う、「だって子供が見ているからよ¹³⁾」

さらに、物語の進展を妨げる重要な要因として、不動のシドロランの前を通り過ぎる通行人たちの存在をあげることができる。次の引用のように、シドロランが独り言を言うと、必ず通行人が立ち止まるのである。

「結構な身分だな」とシドロランは小声で言った。「やつらはおれぬきで結婚披露宴をやるとういうんだな」

「えっ、どうしました？」と通行人が尋ねた。

シドロランは通行人の顔を眺めた。別の男だった。あるいはおなじ男なのにわからなかったのかもしれないが。

「べつに」と彼は答えた。「独り言していたんですよ。長い間ひとりで暮らしていると、この癖がつくんです」

「それをなくすようにしなくちゃいけませんね」と通行人は言った。「みんなあなたが何かを知りたいのだと思います、そして喜んでそれを教えようとする。それがなんでもないとなると、失望するわけです¹⁴⁾」

シドロランはこうして、匿名の通行人たちと幾度となく会話を交わす。通行人のほうではシドロランを認識しているような節もあって、ある箇所では独り言を言うシドロランに対し「それをなくすようにしろと前にも言ったじゃないですか、その癖を¹⁵⁾」と説教する。しかし、結局のところ通行人が同一

¹²⁾ *Ibid.*, p.62.

¹³⁾ *Ibid.*, p.65.

¹⁴⁾ *Ibid.*, p.112.

¹⁵⁾ *Ibid.*, p.130.

人物であるか否か、特定されることはなく、シドロランは未知の通行人たちに翻弄され続ける。

どれだけの通行人がいるのだろうか？ 事実は必要な数よりずっと多くの通行人がいる、あるいは同じ通行人が日ごとに反響しているのだ。あのモーター・バイクに乗った聖職者風の服の男、それは同じ人物...と判断できるだろう。ではあのカナダ娘たちは？ おそらくひとりひとり違う。なぜならイロクオイ人もバベル人もいるのだから。モープ色、あるいはガーネット色を帯びた娘もいるだろうし、未知の言葉を話すのもいるだろう。あの娘は少し真っ黒に色が変わっていた。結局のところ彼女たちは、たぶんみんなおんなじ娘なんだ。通行人と同じように¹⁶。

何者であるのか特定されないまま、小説に登場しては去って行く通行人やキャンパーたちは、物語の登場人物としての位置づけを持たない。シドロランの生活は、物語の進行に貢献しないこのような人物たちとの接触に、大部分が費やされている。

3) 主題にならない主題——絶対的な現在

ここまでで明らかになったのは、16章までのシドロランの物語がある方向へと進展することなく、どちらを向いているのかわからないまま停滞しているということだ。そしてこの停滞こそが、クノーが表現しようと試みた、現在という時間の性質であるように思われる。

小説が執筆されている1964年から物語が展開する1964年に目を向ける場合、個々の出来事が起こっていても、それらを解釈し、論理的に再構成するだけの時間的な距離が欠けている。シドロランは河船の向かいにあるビルの建設現場に行き、「白いヘルメットをかぶった男たちが行き来し」、「いろいろなものが一隅に下ろされる」様子を見て思う。

建築屋にとっては、すべてが理解されているのに違いない¹⁷。

つまりシドロランにとって、今まさに建てられつつある未完の建築物は、理解できる *intelligible* ようなものではないのだ。この建設現場は現在という時間を体現している。現在においては、それぞれの出来事は断片的に投げ出さ

¹⁶ *Ibid.*, p.77.

¹⁷ *Ibid.*, p.28.

れたまま、ある方向に向けて読み解かれることはない。よって、もうひとつの物語によって進行を妨害されるという小説の形式は、対象となる1964年という時代のほうが要請する表現の形式に他ならない。

シドロランの生活として提示された1964年の現実世界は、クノーが『青い花』において描こうとした対象であり、主題である。ところが、現在という時間の性質そのものが小説の主題となることを拒んでしまう。小説の主人公であるべきシドロランが主人公となりえないように、その物語は小説を単独で支えることができない。夢見られた内容という設定のもとに、オージュ公爵の物語と交互に提示することによって、クノーは、主題となりえない現在という時間の性質を表現している。

3 過去へ向かう視線

クノーの目指すものが現在の現実であるならば、過去において展開するオージュ公爵の物語はこの小説の直接的な関心の対象ではないことになる。オージュ公爵の物語はシドロランの物語を断片化すること以外に、現在の現実を捉えるという目的に対してどのようなかたちで貢献するだろうか。

16章までに限れば、シドロランが夢に見るオージュ公爵の物語は、1264年、1439年、1614年、1789年といった過去を扱っているが、この物語の存在理由は、過去の出来事を伝え、歴史を復元することではない。シドロランの物語においては、書いている時と書かれている時との間に時間的な隔たりはまったくないのに対し、オージュ公爵の物語においては、その距離はまちまちであるにしても、書いている時と書かれている時との間に時間的な隔たりが介在する。オージュ公爵の物語において問題とされるのは、この時間的な距離そのものではないだろうか。そこでは、現在から過去を振り返る行為自体が対象となり、現代人の歴史的知識が素材として動員され、利用される。

クノーはオージュ公爵という人物にいくつかの時代を生きさせながら、ある時代を歴史として捉えることの意味を探っている。よって、16章までのオージュ公爵の物語は過去において展開しながらも、問題となるのはむしろ、そういった過去に向けて投げかけられる現在からの視点なのである。

1) 歴史の教科書的知識

オージュ公爵が立ち寄る各時代は、歴史の本から得られたような知識に彩

られている。櫛の木の下に座って第8回十字軍遠征について策を練る聖王ルイの姿や、百年戦争の武勇にも関わらず男色家の人食い鬼として処刑されたジル・ド・レーの運命は、現代の読者が共有する歴史的知識の紋切り型である。

歴史が書き込まれるのは政治史のレベルだけではない。1439年にオージュ公爵が喜んで購入する射石砲や長砲などは、フランスにおける武器の進化を反映するものだ。また、次のような例もある。

「金 *argent* が湯水のように使われてゆく」とシリール殿はつぶやく、そして指を使って食べている司教代理のために言い添える、「そのフォークをお使いなされ」

というのもフォークがあったからだ、それも銀製 *argent* の。

「私はこの習慣になじめそうにありません」とマルブラケが言う。「まず第一に、私にはこの道具が清潔だとは思えません。前にどこに放り出してあったかわかりません。それに対して指は、いつだってどこに置いといたか自分でわかっていますからな」

「時代の進歩に合わせなくては」とトルヴはこの品物を不器用に操りながら言う¹⁸。

ここでは、1614年の時点ではまだ新しく、珍しい道具であったフォークの使用に対する戸惑いが描かれている。

クノーは、誰もが知っている典型的な事件から、専門書が伝える細部まで含めて、現代人が持つに至った歴史的知識を広い範囲で取り上げ、素材としている。

2) 時代錯誤

オージュ公爵の物語が現代の視点を前提としていることは、意図的に行われる時代錯誤によってさらに明らかになる。十字軍への参加を断ったオージュ公爵に対し民衆が怒りを露わにすると、公爵は考える。

けれども人は毎日バステューを占領するわけではない。ましてや十三世紀においてはそうである¹⁹。

¹⁸ *Ibid.*, p.118.

¹⁹ *Ibid.*, p.36.

この箇所では、1264年の時点ですでに1789年のフランス革命を先取りしているばかりか、バスティーユ牢獄が造られたのが十五世紀であるから、二重に時代錯誤が行われている。

この他にも、公爵は1264年においてサント・シャペルを訪れる際、「ゴシック芸術の宝石²⁰」と、現代の旅行ガイドふうに寺院について語り、「ゴシック」という十三世紀には使われていなかった形容詞を使っている。また、後に公爵の妻となる木こりの娘リュシュルは1439年の時点で、「カルマニョル踊りを踊りましょう²¹」と、フランス革命のときに流行ることになる輪舞を踊ってみせる。

3) 世界観の相対化

しかし、このように後世の知識が先取りされる一方で、現代においてはすでに迷信として整理済みの内容が、それぞれの時代の世界観として提示される場合がある。

オージュ公爵は1614年に錬金術師ティモレオ・ティモレイと出会い、この人物を城に住ませるのだが、1789年の段階でも依然として錬金術を信じている。また、1614年においてコペルニクスの地動説は異端とされ、「太陽は地球の周りをまわるのです」という占星術師の言葉に人々は賛同する²²。オージュ公爵やまわりの人々は、ときに現代における歴史的知識を先取りするものの、やはり当時の世界観を信頼して生きているのだ。

このような迷信をオージュ公爵の物語に書き込むことで、クノーは、それらを迷信と判断しているような現代人の歴史的知識を揺るがそうとする。つまり、過去において真実だった錬金術や天動説が今では迷信とされるように、現在において信じられている世界観が後になって迷信と判明する可能性があることを示しているのだ。

この小説では、ラスコーやアルタミラの洞窟壁画の作者が実はオージュ公爵であるという設定にしてある。司祭に前アダム人の存在を証明するため、1789年に公爵は洞窟へもぐり、壁画を描いて前アダム人の存在を示す証拠とした。クノーはこの物語によって、現代人が共有する歴史的知識への信頼を揺るがそうとした。

²⁰ *Ibid.*, p.27.

²¹ *Ibid.*, p.107.

²² *Ibid.*, p.151.

シドロランの物語は、オージュ公爵の夢という設定のもとに断片的に提示され、現代の現実世界のあり方をそのままに写していた。それに対しオージュ公爵の物語においては、シドロランの夢という設定にすることで、時間的な隔たりのある各時代をひとつの人生の流れの中に組み込むことができる。シドロランがオージュ公爵の姿のもとに、いくつかの時代に及ぶ人生を夢見することは、人類が獲得するに至った「歴史」のあり方を表している。人が生きる時間や、その間に立ち会うことのできる出来事には限りがある。しかし人類はひとりひとりが持つ断片的な知識を歴史として集積することによって、限りない時間の広がりを見野に入れることを可能にした。歴史とは、資料によって裏付けられる限りの時間的広がりを、ひとりの人物の人生のように眺望するものである。

オージュ公爵が、過去へと向けられる現代人の視線を体現するのであれば、17章以降この人物を現代に登場させることは、今、作者が生きている時間を歴史的な一時代として捉える模擬実験に他ならない。オージュ公爵の物語は、迷信も含めてさまざまな方向から歴史に光を当ててきたが、17章以降ではシドロランの物語と融合して、絶対的な現在として提示されるのみだった1964年に歴史的視点を導入する。

4 歴史の關——1964年

1964年において展開するシドロランの物語は、河船「箱船号」のように進むべき方向性を持たず、切れ切れの断片が投げ出されているのみであった。それは未完の建築物と同様に、理解され、解釈されることもない。ところが17章以降、オージュ公爵の到着とともに1964年の断片たちはある方向へと動機づけられ、読み解かれうる物語を形作ようになる。16章まで、1964年は絶対的な現在として捉えられていたが、それはこの年代のひとつの顔に過ぎない。1964年はもうひとつの顔を持っているのだ。

1) 探偵小説へ

オージュ公爵は1264年から出発して175年間隔で時代を下り、17章でついにシドロランの住む1964年に到着する。パリへ観光に来た公爵と取り巻きのものたちは、二匹の馬を連れているために適切な宿泊場所を見つけること

ができず、やむをえずシドロランの河船に滞在することになる。こうして二人の主人公が共同生活を始めると、1964年の世界は質的な変化を受ける。シドロランの生活は断片的で、進むべき方向性を持たないまま停滞していたが、17章以降はひとつの物語としての輪郭を持ち、ある方向へ向かって進展し始める。

シドロランは、何者かが河船近くの囲いを「暗殺者」という落書きで汚すので、ペンキを塗り直すことを日課としていた。女中として雇ったラリックスの勧めで、彼は犯人を捕まえるべく夜間に見張りをしたが、ひどいビールス性気管支炎にかかり、諦めたことがあった。それを知ったオージュ公爵は、「これぞわれわれ騎士にうってつけの武勲じゃぞ。われらが主シドロラン殿を落書き魔から解放してさしあげるのじゃ²³」と言って、犯人を現行犯で捕まえる決意をする。こうして犯人探しを開始され、小説は探偵小説の様相のもとに展開するようになる。オージュ公爵と従者のアンボワーニュはまず、夜中に囲い付近にいたラ・バランスという人物を犯人として捕まえる。ラ・バランスは、シドロランがよく見物に行くキャンプ場の元管理人だが、河船の向かいに建設中で、完成が間近のアパートの門番になったばかりであった。彼は自分が落書きの犯人ではないことを主張して次のように言う。

ともあれ、みなさんに関係のない、説明するには長すぎる理由によって、私はキャンパーたちのキャンプのためのキャンプ場の夜の番人となったのですが、明け方に帰宅するとき、今みなさんがこうして乗っている、そして私が意に反して乗せられているこの河船の前にある土地の囲いに、誰かがしょっちゅう悪口を書いていることに気が付くようになりました。[...]そこで私はちょっとした調査に乗り出しました。そしてシドロランさん、あなたの不運と、そしてあなたが犠牲となった重大な不正行為を知ったのです。無実の男が二年間もの未決拘留を受ける！ あなたが犠牲になっている迫害は、それだけよけい辛いことのように思われました。不正な制裁によってあなたを悩ませ続けているその卑劣漢の正体を暴こうと、私は河岸の反対側に建てられたアパートの門番として雇われたのです²⁴。

シドロランの過去については16章まででも少しずつ明かされていた。しかしここでは、脈絡なしに小説に登場していた人物や出来事が線で結ばれ、探偵小説全体の部分として位置づけられる。シドロランは暗殺者の濡れ衣を着せ

²³ *Ibid.*, p.239.

²⁴ *Ibid.*, pp.251-252.

られて一年半の未決拘留を受けたことがあり、無実を証明され釈放されたあとも、何者かに落書きによって嫌がらせをされている。それに気づいたラ・バランスは、シドロランを不正に裁いている人物を捕らえようと、毎晩待ち伏せをしていた。

こうして、何も起こらないように思われたシドロランの生活に、実はある流れがあったことが判明するのだが、このように同じ現実の見え方が変化することは、オージュ公爵の到着がもたらした結果なのである。16章までは絶対の現在として断片性が強調されていた1964年の世界が、17章以降は、過去から続く時間の流れの中に置き直される。オージュ公爵は現代を歴史として見る視点を導入するのだ。

この変化は形式面にも反映される。1964年に到着したオージュ公爵は「ぐっすり夢も見ずに眠る²⁵」ようになる。シドロランも同様である（「ほとんど夢を見ないで昼寝したよ²⁶」）。16章までは、1964年の現実世界の断片性は、夢によって断片化されるテキストのあり方と呼応していた。17章以降、物語がある方向へ向かい始めると、テキストは夢によって断片化されることなく、一続きのディスクールとしてその物語を伝えるようになる。

2) 物語の破綻

前章で述べたように、オージュ公爵は過去へ向けられる現代からの視線を体現し、いくつかの時代を生きながら歴史に多角的な光を当ててきた。よって17章以降この人物を1964年に登場させることで、クノーはこの年代を、フランス革命のあった1789年に続く歴史的な時代として捉えようと試みていることになる。つまり、1964年を持つ、歴史上の一時代としての顔を描いているのだ。オージュ公爵が立ち会うシドロランの事件は、現代を代表する歴史的な出来事として選ばれたものなのである。

探偵小説の外観のもとに動き始めた物語には次のような結末が待っている。落書きの犯人としてオージュ公爵の手で捕らえられたラ・バランスは、自らの無実を証明するため、次の晩、真犯人を捕まえる。するとその真犯人はシドロラン自身であった。つまりシドロランは、自分自身を中傷する落書きを書いては自分で消すという作業を繰り返していたことになる。彼が迫害されていると思い込んでいた女中のラリックスが、「あなたは私のことを馬鹿に

²⁵ *Ibid.*, p.235.

²⁶ *Ibid.*, p.244.

したわ²⁷」と言うと、こう答える。

私は誰のことも馬鹿になんかしなかった。ただ、私はやることを見つけただけさ。人生におけるひとつの気晴らし、それだけさ²⁸。

確かにシドロランの行動は「気晴らし」とでも言う以外、いかなる論理的説明をもすり抜けるものだ。落書きの犯人を探す試みは、犯人が捕まった時点でその試み自体の意味が失われ、完全なる無償性に還元されてしまう。

探偵小説がこうして破綻すると、それはラブストーリーへと横滑りする。落書きの真犯人を知ったラリックスは河船を出て行こうとする。

彼女は頬の上に流れている湿気をポンポンと拭って、それから力強く鼻をかんだ。

「行くわ」と言い添えた。

彼女はスーツケースを持ち上げた。

「これからどうするんだい？」シドロランは尋ねた。「またアルベールさんに会いに行くのかね？ 仕事を探す？ 家に帰るのかね？」

「そんなことあなたに関係あるかしら、だって私はあなたの人生から出て行くのですもの！」

今言ったばかりのことで彼女はあまりに泣けてきたので、またスーツケースを置かなければならなかった。

「そんなに泣くくらいなら」とシドロランは言った、「出て行くのはよせよ²⁹」

ラブストーリーにおける典型的な別れの場面を経てラリックスは河船を去るが、街で出会ったオージュ公爵たちに説得されて再びシドロランのもとへ戻る。

シドロランの事件は結局、ラ・バランスの死によってひとつの結末を迎えることになる。建設中だったアパートが崩壊し、彼は残骸の下敷きとなって死んだのだ。

3) 歴史の闇

17章以降は現在を歴史的に見ようとする視点の導入によって、物語がある方向へ向かい始めるものの、結局は破綻することになる。第二章で述べたよ

²⁷ *Ibid.*, p.263.

²⁸ *loc.cit.*

²⁹ *Ibid.*, pp.263-264.

うに、現在としての1964年は、再構成するだけの時間的距離の欠如により、断片的にしか捉えられない。そして、敢えて歴史的視点を導入して時間的な継起や因果関係を読み取ろうとしても、シドロランの事件はそのような方法論とはかみ合わないために、歴史的な視線をすり抜けてしまい、その事件を語る物語は破綻することになる。先行する四つの時代と1964年との間に、クノーは何らかの断絶を見ているのではないだろうか。

シドロランを中傷する落書きと、その原因と思われる出来事について語られるのは、上に引用したラ・バランスのセリフが最初ではない。シドロランが体験した出来事は、オージュ公爵の到着によってひとつの物語に収斂されるのを待ちながら、16章までにもすでに断片的に語られていた。

まさかキミは書いてあったことを信じているわけじゃないよね？ ぼくは暗殺者じゃない。人殺しでもないよ。なんでもないんだ。ぼくは無実だ。ぼくは一年半決拘留を受けた。ついには無実だってことが認められた。ぼくはそれでおしまいだと思った。ところが違った。キミの言うように、そのバカがいて、ぼくの言う落書きがある。でもぼくは建物に色を塗るのが大好きさ。他にはそんなにやることがないから、それでひとつやることができる。そのお陰で、ぼくの囲いは川岸で一番手入れがいいってわけさ。ぼくはこういうことをいろいろキミに話すけれど、でも本当のところは一度もそんなことを考えることはない。それはぼくには関係がない。あんまりね³⁰。

シドロランは14章で、女中として雇ったばかりのラリックスに過去の出来事と落書きについて語る。注目すべきはその語り方である。彼は、自分の身に起きた出来事を語ったあと、「でも本当のところは一度もそんなことを考えることはない。それはぼくには関係がない。あんまりね」と言う。自分の体験を垣間見せたあとでその重要性を否定するこの態度は、落書きを書いては消すという身振りに通じるものである。

シドロランは過去に暗殺者として捕らえられ、拘留された。この出来事を彼はいったいどう受け止めているのだろう。本当にどうでもいいのなら、なぜわざわざ落書きをし、自ら消すのか。そして、もしその出来事について忘れられないのなら、なぜ明確な言葉をもって語り、主張しないのか。小説からわかることは、シドロランの中で、語ろうとする力とそれに対する抑圧とが共存し、せめぎ合っていることだ。

四つの時代の歴史的出来事を観察してきたオージュ公爵は、現代において

³⁰ *Ibid.*, p.187.

歴史を捉え損なったのだろうか。あるいは、現代にはそもそも歴史がないのだろうか。こういった問いに答えるのは容易ではない。オーギュ公爵はある意味においては現代の歴史的事件のひとつに立ち会ったと言える。ただし、公爵の視線が捉えたのは、「出来事」として言葉では語られず、語ったら「出来事」の真実が裏切られるような、歴史のあるアспект——歴史の闇——であった。そしてそのような「出来事」を、オーギュ公爵は現代を代表する歴史として選んだのである。

4) 語らない小説

自ら言うように、シドロランが冤罪事件の被害者であったとしても、また、実際に殺人を犯していたとしても、そういった事件は、いつ、どこで起こり、どんな経過を辿ったのだろうか。殺されたのはいったい誰なのか。また、刑務所に拘留されたシドロランは、そこでどのように過ごしたのか。シドロラン自身が語らないだけでなく、小説は、事件を構成するはずのこれらの要素をほとんど何も伝えていない。この、シドロランをめぐる事件は、名前を持たず、特定の場所や時間に結び付けられることもなく、対立関係なども不明瞭なまま放置される。『青い花』が伝えるのはまず、ある「出来事」を言葉によって語ることの不可能性そのものである。そしてこの小説には、語られえないという理由により、その「出来事」と、「出来事」を体験した人物とが迎えることになる運命が書き込まれている。

言葉で語られない「出来事」は忘れ去られ、そんな「出来事」など存在しなかったことにされてしまう。シドロランの末の娘ラメリーが結婚して河船を出たとき、代わりに家事をする若い女性を紹介してもらおうと、彼は古い友人のアルペールに会う。そして二人はこんな会話を交わす。

「なぜ職業紹介所に行かないのかね？」

「わたしについてたてられた評判のことがあるから…」

「あんたはまだみんながあんたのことを考えていると思うのかね。もう忘れちゃってるよ。」

シドロランはアルペールのこの言葉に対して、「そんなことはないさ、だって罫いに落書きをするやつがいるんだから³¹」と答える。

彼は過去に自分が関わった事件について人々がたてた評判のことを気に病

³¹ *Ibid.*, p.100.

みながら、実のところは、その事件が忘れ去られることをより怖れているのではないだろうか。シドロランは自らが経験した出来事の現実や、その出来事への思いを言葉によって語り、人々に訴えかけることはしない。ただ、人目につかぬよう隠れて、「暗殺者」と自分に宛てて書くことによってのみ、語ることでできない何ごとかが確実に起こったことを繰り返し合図している。小説はこうして、シドロランが生きた「出来事」を語ることなしに指し示す。

クノーはこのような現代の「歴史」を扱うにあたって、行為の主体だけでなく観察する主体をも視野に入れている。落書きの犯人がシドロランだとわかったときラリックスは次のように言う。

あなたは例の落書きを書きに行くとき、体中ウイキョウのエキスにどっぷり浸かっているに違いないわ。自分の悪口を書くだなんて！　なんでそれをやっている最中お尻を出して見せないの？³²

彼女は自分自身を中傷する落書きを書くという行為を、「尻を出して見せる」と同列の変態行為として扱い、シドロランは気が変だと言って河船を去って行く。しかしその後、オージュ公爵と次のような会話を交わす。

「あんたは彼に惚れとるのかね？」

「ていたんです」

「要するに、愛しとるんだな」

「はい、愛してました」

「で、そいつは普通だったかね」

ラリックスはびっくりして、黙った。

「...」

「わかるかね」と公爵は言った。「普通なんてことはなにもありません³³」

オージュ公爵はこうして、シドロランを変人扱いするラリックスに向かって、そのような判断を下すための基準など存在しないことを教える。

オージュ公爵は現代において、歴史の闇とも言うべき、言葉によって語ることでできない「出来事」に立ち会う。その上で、そういった「出来事」に判断を下し、批判するための基準がないことを告げている。これがオージュ公爵の役割である。

³² *Ibid.*, p.263.

³³ *Ibid.*, p.268.

結び

本稿の目的は、クノーが『青い花』において捉えようとした対象と、そのために用いた書き方との対応関係を明確にすることであつた。この目標はここまでで達成されたように思われるので、最後に指摘したいのは以下の事実だけである。

クノーは現代を代表する歴史として、語ることのできない出来事を、歴史の闇の部分を選んだ。語りえない故に、その出来事を語る物語は物語として成立せずに、破綻する運命にある。しかし『青い花』は、そのような語りえない現実があることを確実に指し示している。クノーは、言葉によって語るはずの小説というジャンルが、言葉では語りえない現実さえも、ある方法によって「語る」ということを知っている。